(別紙2)

論文審査の結果の要旨

朴　倍暎

本論文は、江戸時代の儒学者伊藤仁斎の思想、特にその『中庸』解釈をめぐる所論を手がかりに、儒教における「人倫」概念の基礎づけがいかになされ、またそれがいかなる今日的意味を持ちうるかについて考察を加えたものである。

論者朴倍暎君の研究関心は、東アジア儒教が人間論・社会論としていかなる今日的可能性を持ちうるかを探究することにある。同君が特に注目するのは、人間社会の秩序的全体を言い表す「人倫」概念が、いかに基礎づけられてきたかという点である。

東アジアの儒教社会において、人は「人倫」を実現すべきであるという命題は長らく自明のこととみなされ、この命題自体がなぜ正当なものであるのかという問いは、自覚的に問われることが少なかった。人倫の実現が人間にとって本来的な事柄であるということを本格的に基礎づけたのは、朱子学と呼ばれる儒学思想である。朱子学は、形而上の「理」によって人倫を基礎づける。しかし、自然と人間社会を連続的に捉える朱子学の見方は、人間社会それ自体の内に秩序の根拠を見出そうとする近代的な人間観・社会観とは、根本的に相容れないものである。そこで朴君が注目するのは、朱子学を批判しつつ独自の人倫思想を展開した伊藤仁斎の思想である。そして、仁斎思想の内に儒教的人倫と今日的な世界観とを媒介するものを見出そうとする。

朱子学の人倫論は、『中庸』の有名な「性・道・教」テーゼの解釈に根拠をおいている。朴君は、このテーゼをめぐる仁斎の思索を精緻に読み解きつつ、仁斎がいかにして「人間」の内に人倫の根拠を発見していったかを三つの段階に分けて明らかにする。第一に、「性」を「理」であると捉える朱子学の基本命題に反対し、仁斎があくまでも、現に生じてある人のあるがまま（已発）を以て「性」と捉え、そこをすべての議論の出発点としていること。第二に、道の本体と、道を実現する人間の行為的連関とのレベル差を明確にし、人倫を、人間の作為・人為の全体において現れるものと捉えること。そして第三に、したがって人倫とは、歴史的・個別的主体の自己実現の全体であり、「歴史的現実態」としての「政」の場面で明確になること、を明らかにしている。

以上、本論文は、人倫の基礎づけ論を儒教本来の民本主義的方向において展開する可能性を仁斎思想の中に見出したものである。特に、作為・人為の根拠を「性」をめぐる形而上学的思索の内に位置付けた点は、仁斎論として高く評価出来る。一方で、『中庸発揮』以外の仁斎の諸著作に関しては論じ残されている点もあり、特に仁斎の実践論と人倫論との具体的関係についての考察は、今後の課題である。とはいえ、仁斎思想の解釈において、新しい視点からの読みを提起し、首尾一貫した論証を示した点は十分評価に値する。

以上により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。